



Symposium

座談会

なぜ決められない？
学校・教師は何ができる？

特集の最初に登場いただくのは、
深い生徒理解や問題意識をおもちの4人の先生方。
日々生徒と接するなかで感じている、
高校生の「決められない」実態や課題感、
その背景や要因と思われること。
そして、今、学校や教師ができることは何かについて、
自由にお話しいただきました。



広島観音高校
黒瀬直美先生



成田高校
宮永厚先生



高知追手前高校
林格先生



専修大学附属高校
杉山比呂之先生

テーマ1 「決められない」のはなぜか？

——さっそくですが、生徒の「決められない」現状と背景について、現場で感じていることをお聞かせください。

黒瀬 この座談会に参加するにあたり、起業者の方にヒアリングしたんです。今の高校生が「決められない」としたら、それはなぜか、教育現場以外の人の話を聞きたくて。そうしたら二つの答えが返ってきました。一つは、「職業に対するイメージが狭すぎて選択肢がないからでは」と。確かに、うちの生徒はクラブ活動や宿題など目の前のことではいいで、将来のことを考えたり、調べたりする余裕があまりありません。そういう私自身、民間で働いた経験もなく、職業理解が低いことは自覚していますが。

宮永 本校でも、付属の中学校から職業調査や課題研究をしています。それだけで実際の仕事のイメージが湧くわけではないですからね。まだ、記憶してよい点数を取ることが優先で好きなテーマを自ら決めて研究することに踏み出せていないと感じます。

林 教師や医師や看護師など、なじみのある職業に興味がある生徒は、進路を決めるのも早いですが、そうで

はない生徒は、志望大学・学部がなかなか決まらない。生徒が時間に追われているのは本校も同じです。

杉山 うちが大学の附属校で、8割以上が親大学に進学します。ですから他校と比べ、進路選択に迫られているわけではありません。その分、ゆとりがあるのに、自分と向き合う時間があるかという疑問で、これからの課題として残っています。

黒瀬 もう一つ、「決められない」理由としての方があげたのは、「一度失敗するとやり直しがきかない社会だからでは」ということでした。「失敗しても何度でもやり直しができる社会であれば、決めることを躊躇しないはず。失敗できないから、決めることを避け、親や先生の言うとおりにするのは」と。鋭い指摘でした。

林 私も含め、教員が無自覚的に「正解」を押しつけているところがあるかもしれません。生徒に「好きなようにしろ」と言いながら、それが教員の考える「正解」から外れていると、つい「それはどうかな」と否定してしまう。そんなやりとりが小さいころから積み重ねること、自分で決めなくなってしまう。もしくは、大人が求めている答えを探ったり、自制したりする。そうやって枠にはめているところもあるような気がします。

黒瀬 親は「良い大学、良い会社」と期待しますが、そうした昭和型のモデルは既に崩れかけています。一方で、「AIの進歩で近い将来、今の職業は半分なくなる」みたいな報道もされています。これでは生徒が混乱するのも無理ありません。

宮永 教科指導や部活動指導は得意で力が入っても、進路指導やキャリア教育には関心が薄い人が多いように思います。教員自体が社会の変化に追いついていないでしょう。

杉山 調査結果(図1)では、進路指導上の課題の1位が「進路選択・決定能力の不足」になっていますが、僕自身は、生徒のこのような能力が不足しているとは思っていないので、正直ピンときていません。確かに若い生徒はいますが、目標をもった生徒は、自らどんどん決めていきます。多様化した生徒一人ひとりに対応しきれない教員の責任も大きいのではないかと思っています。

——そもそも、「決められない」となにか問題なのでしょうか？

黒瀬 私の息子はサッカーばかりしていて進路に無関心。高3になってようやく「教員にでもなるか」と言って勉強を始めました。でもそれは、親や先生から示したような選択肢だったため、身が入らず受験もうまくいきま

せんでした。そこで初めて「自分は何がしたいか」を真剣に考えた結果、目標が見つかり、人が変わったような予備校生活を経て、第一志望に合格しました。自分で決めたときのエネルギーはやはりすごいと思いました。

林 目標を見つけたとき、力を発揮するのは毎年感じるところです。担任が「この成績では難しい」と思っている、信じられない伸び方をする例は数え切れません。

黒瀬 もちろん、第一志望に届かない子も大勢います。でも、自分で決めてやりきった子の表情は晴れやか。失敗や挫折を経験した子は強い。絶対に次のステージに活かされますよ。

杉山 本校の生徒は真面目なので、大学生活もしっかり送るし、就職も順調。でも「あの会社、辞めました」と聞かされることもあるんです。つまり、最初の大きな挫折が20代の半ば過ぎに来ることがある。そのとき、困難に動じず、立ち向かうためにも、小・中・高とトライ&エラーを繰り返す機会をつくる必要があると思います。

テーマ2

みんなで「決める」とはどういうことか？

——進路選択を中心に、高校生個人が何かを決めることの意義と難しさ

決められない状況にしているのは、変化に対応しきれない私たちでは

専修大学附属高校(東京・私立)
杉山比呂之先生

すぎやま・ひろゆき ●担当教科は地理歴史科(日本史)。入試広報部主任。アクティブ・ラーニング・ワーキンググループ主任。野球部および歴史社会研究会顧問。専修大学兼任講師。「5年間担任から離れているのですが、附属高校の教員としての立場からお話しできればと思っています」





図1 進路指導上の課題として、(生徒の)「進路選択・決定能力の不足」が上位に

	2010年	2012年	2014年	2016年	2018年
1位	進路選択・決定能力の不足	進路選択・決定能力の不足	教員が進路指導を行うための時間の不足	教員が進路指導を行うための時間の不足	進路選択・決定能力の不足
2位	家庭・家族環境の悪化:家計画について	家庭・家族環境の悪化:家計画について	進路選択・決定能力の不足	進路選択・決定能力の不足	教員が進路指導を行うための時間の不足
3位	教員が進路指導を行うための時間の不足	教員が進路指導を行うための時間の不足	入学者選抜の多様化	入学者選抜の多様化	入学者選抜の多様化

■フリーコメント(現状や要因についてのコメントを編集部で抽出)

安易に決める、他人任せ

- 大学名や偏差値により進路を決めようとする生徒がまだ多い。
- 安易に進路を決めたことで、離職や退学する生徒がいる。
- 友人や親の意見で決定している。
- 先生や親の言うことは聞けるが、自分で進路を決められない。
- 失敗を恐れるがゆえに高い目標をたてず、達成可能な位で満足する。

与えすぎによる自立心の低下

- 子どもへのさまざまな対応やサービスの過剰さが自立を疎外。
- 何もかも与えられ、恵まれた状況故に切迫感が欠如している。

キャリア意識の低下

- 自分の人生の第一歩、将来に関わる重大な選択という意識が低い。
- 社会(職業)の多様性と自分の可能性に充分気づいていない。
- 将来、何がしたいかわからない、できれば働きたくないという生徒も。
- 大学進学さえできれば、という発想。

選択肢や価値観の多様化

- 生徒も親も社会も価値観が多様化し、指導が困難。
- 進路の多様化により選ぶことが難しくなっている。
- 大学入試制度と社会変革の過渡期で指導も一貫できない面が。

低い自尊心

- 自己肯定感が低く、周囲の指示に従って行動してきたことで自己決定の力が弱い。
- 自分に自信がない。自分に興味のない生徒がいる。

時間不足、指導力不足

- 情報や体験を与えてじっくり考えさせる時間の余裕がない。
- 教員の情報収集力、指導力不足。

その他

- 部活動中心。目先のことに夢中。
- 地元志向が強すぎる。
- 家庭の事情、経済面が深刻。

※リクルート進学総研「高校教育改革に関する調査2018」より

が見えてきました。集団の中で決めることに関してはどうでしょう？

黒瀬 中学までは、何かを決める際、学力の高い子がリーダー役となり、率先して決めてきたのに、今の勤務校には、そういうタイプが少なく、決めることに戸惑う様子も見えます。そのため1年生を中心にリーダーシップ教

育が必要だと感じています。

林 その点、うちは、リーダー経験のある生徒が多いはずですが、全体的に大人しく、自分から前に出ていく感じではありません。気の利く子が案を出し、他に意見が出ないので、そのままその案に決まることも多い気がしています。

宮永 特に文化祭の出し物はなかなか決まらないですよ。いざ決まっても、女子はがんばるけど、男子は控えめというのはよく見る光景です。

黒瀬 合唱祭の指揮者や、体育祭での多学年にまたがるリレー種目にも出たがりません。要するに必要以上に目立つことや、責任が重いことを嫌がるのです。特に1年の初期は、SNSの影響もあって、目立ちすぎると何を言われるかわからないので、変に身構えてしまいがちです。

宮永 人間関係ができる以前のSNSの使われ方は大きな問題です。

黒瀬 ネットでの芸能人たたきなど現実社会で起こることが学校で起きても不思議ではありません。そのためLHRなどでネットリテラシー教育をしています。良い意味でのスルー力や身につけてほしいです。ぎくしゃくした段階を乗り越えて「この集団は自分を受け入れてくれる」という信頼関係ができてくれば、自然と発言できるようにになるので。

林 教員の世界でも、皆で何かを決めることは難しい。提案しても「また、あんなこと言つて」と言われ続けたら、躊躇するようになりますよね。

—— 集団で何かを決めることが難しいのは教員も同じというなかで、どのような工夫をされていますか？

失敗した経験が人を成長させる。
その機会を学校が奪ってはいけない



広島観音高校(広島・県立) 黒瀬直美先生

くろせ・なおみ ●担当教科は国語科。カリキュラムマネジメント推進委員。教育研究部で授業改善や総合的な探究の時間に向けてのカリキュラム編成を担当。文芸部顧問。「定時制、商業高校、普通科、中高一貫校、総合学科など、多様な学校の勤務経験からお話しできればと思います」

黒瀬 大人数での話し合いでは、沈黙することも多いので、研修会のスタイルを分科会方式に変えました。KJ法などで対話量を増やすような仕掛けをしたところ、活発かつ焦点化した意見が出るようになりました。

杉山 本校も、対話を意識した研修を自前で始めています。グループワークだと意見が出やすいので、各部署では盛り上がってきたのですが、いざ職員会議になると消極的になるのが課題です。

黒瀬 自分の意見を表明すると思うと腰が引けますよね。うちは、授業改善の取り組みとして以前から授業にも少人数での話し合いを取り入れているんです。その際、「グループ内で遠慮なく言い合って、出てきた意見を代表者が発表しましょう」と言うと、他人から出てきた意見だから、ある意味で無責任に堂々と発表できる。そんなことを続けていたらクラスの雰囲気気が良くなりました。

杉山 いいヒントをもらえた気がしますが、集団で何かを決めるとき、一人ひとりの中では、ある程度決まった意見があるはずですよ。問題は、それを出しやすい場づくりですね。

黒瀬 うちの若い先生が積極的。研修で得たものをすぐ実践に移し、共有してくれます。若い人が誇らしげ

にやっているから、ベテランも負けてはいけないという気にもなるんです。

テーマ3 学校や教員ができることは？

——多くのヒントが出てきましたが、改めて「決められない」生徒に対して、学校や先生ができることは？

黒瀬 キャリア教育を充実させるにつれ、将来を真剣に考える生徒が増えてきた気がします。こんな3年生もいました。「私は何がしたいのかわかりません。だから総合的な学習の時間のテーマは『私のキャリア教育』にします」と。そんな課題を選んだ生徒は初めてでしたから、いろいろと助言したところ、徹底的に適性検査や職業調べを行い、課題学習に取り組んだ結果、確固たる目標にたどりついたんです。この生徒のようにPBLや探究学習に取り組むことで、自分がしたいことに気づき、道を切り開くきっかけが生まれるかもしれません。

宮永 教科でもキャリア教育はできません。中学校の技術の授業で、自分が気になっている事例を調べ、意見をまとめてもらったことがあります。身近なことが、さまざまな学問や職業に繋がっているのだと気づくことが目的でしたが、ゲームへの興味から、プロゲ

ラミングやマーケティング、ITビジネスに関心が広がっていくなど、有意義な授業になりました。高校も同様に授業・HRともにグループワークのチーム分けを工夫することで化学変化が起き、一気に輝く生徒が出ることも珍しくありません。

杉山 外部人材の活用も効果的。以前は、教室に外部の人を入れることにはばかる空気がありました。最近では歓迎されています。それに今、ファシリテーターとかコーディネーターなど教員の役割が増えています。すべての役割を果たそうとしたら負担ですが、チーム学校というように、学校には多くの教職員、関係者がいます。だから自分が不得意なことは任せたい。そう思うようにしたら気がラクになりました。教職員同士が多様性を認め合うようになれば、生徒も、皆で決められるようになるはずですよ。

林 多様性という点では、生徒の価値観が広がっているわけですから、できる範囲で、個人面談の時間を確保したいです。1対1の対話の場合、教師の問いに答える必要があるため、「じっくり考えたことはなかったけど、本当の自分はどうかだろう」と、自分との対話が生じることもあるので、そこを意識して面談しています。

杉山 先日、卒業生にこう指摘され

人との対話はもちろん大切。 それ以上に、自分自身との対話も大切

高知追手前高校(高知・県立)
林 格先生

はやし・いたる●担当教科は理科(物理)。企画研修部では、総合的な学習の時間のほか、学校行事、校内研修を企画。女子バレーボール部顧問。高1担任。[本校には9年間勤務していますが、幸い8年間、ホームルーム担任をさせていただいています]





ました。「先生は、いつも相互承認の大切さを訴えていたけど、それ以前に、今の若者は自己承認ができていません。自分がわからないのに相互承認など無理ですよ」と。その通りで、冒頭申し上げたように、自分と向き合う時間が必要だと思っています。

宮永 本気で考えるのはきつかけが必要なので、面談では揺さぶりをかけることを心がけています。個人的には、「もはや未来は予測不能なのだから、大学のブランドや職業イメージではなく、好きなことを突き詰めることが、ますます大事なのは」と伝えるようにしています。

——自分で決めることが原動力になるし、失敗したとしても得るものは大きい、という話が印象的でした。

黒瀬 文化祭で劇をやると決めたクラスがありました。劇は大変なので「やるからにはがんばれ」と言ったのですが、重要な女子の役が決まらず、泣きつかれたんです。私の一存で配役を決めることもできたんですが、ぐっと耐えて二度決めたのだから最後まで話し合いなさい」と言ったところ、ぎりぎりまで話し合った結果、男子生徒が腹をくくって引き受けてくれたとのこと。そうしたら本番でバカ受け。その男子に無理を言った手前、全員が協力して本当に良い劇になりました。

仮に失敗したとしても、それはそれで人生のプラスになったかと思うと、教員は我慢しないといけないですね。

林 本校でも、文化祭をもう少し生徒の自主性に任せようと話を進めているところですよ。人と何かを決めようとする、思い通りにいかないこともあり、葛藤が生じ、それこそ自分との対話にもなるはず。そんなきつかけとなることを期待しています。

宮永 失敗したくないのは教員も同じですが、そういう人ばかりでは、新しいことに踏み出せず、踏襲が多くなります。今の学年主任は、「失敗してもいいから積極的にやれ。責任はとるから」と言ってくれる人。なので教員も同様に、「うまくいなくてもフォローするから安心して挑戦しろ」と生徒に伝えることができます。

——貴重なお話ありがとうございます。最後にひと言ずつお願いします。
杉山 一流の天ぷら職人は耳を研ぎ澄ませ、音の変化で揚げるタイミングを計るという話を聞きました。私は今、担任をもっていないので授業が勝負なんです。40人を相手に耳や目を研ぎ澄ますことを意識したら、これまで以上に生徒のことが見えるようになりました。手を盛んに動かしているようで、実は悩みを抱えていたり。そういうことをきつかけに、より深く話を聞

くようにしています。

宮永 生徒が発するサインを見逃さないことですよ。本校ではできるだけ毎日、手帳のやりとりをしています。進路の悩みや、学問や職業についての質問もあるので、こちらも必死。引き出しを多くもつ必要があるし、知識がないとしても、教員が二から調べ、学ぶ姿勢を見せれば、生徒に伝わると信じています。

林 ある方が「自己実現とは、自分になること」と話していて、腑に落ちました。自己実現という言葉に対する私のイメージは、大きな目標に向かって必死によじ登るものでした。でもその方は「本当になりたいもの、やりたいことは、自分の中にある。今までの体験で楽しいと感じたことや、憧れたことの近くにあるはずなので、そこを深掘りしていけばいい」というのです。そうしたことに気づける機会を提供できればと思っています。

黒瀬 最後、大きな話になりますが、教育や社会のシステムが、もっと自由に行きつ戻りつができるようになることを期待しています。そのうえで学校が、それこそトライ＆エラーができる場となる。生徒が安心して失敗でき、先生もそれを温かく見守れるようになれば、自ずと、「決められる」ようになると思います。

きっかけがあれば生徒は劇的に変わる。 そのための働きかけ、揺さぶりを

成田高校(千葉・私立)
宮永厚先生

みやながあつし ●担当教科は技術・家庭科。入試広報部副部長。高3担任。文芸部顧問。「付属中学校で採用され、高校に来て10年目です。入試広報の担当が長く、説明会などを通じて他校の実践を知る機会が多く、それを自校の課題改善につなげています」

